

ハナアザミウマに対する各種薬剤の防除効果

かんきつの果実着色期において、ハナアザミウマの加害が問題視されている現状があることから、各種薬剤への防除効果を検討するとともに、一部の薬剤については人工降雨処理による影響を検討した。

■ ハナアザミウマの生態的特徴と被害

◆ 生態的特徴

- ✓ 年十数世代以上
- ✓ 主に花に集まり、花粉を食べるが、植物組織の吸汁も可能で、果実着色期に果実を加害
- ✓ 10～11月に開花するセイタカアワダチソウはハナアザミウマの強力な増殖源

◆ 被害の特徴

- ✓ 吸汁により白色のカスリ状となる
- ✓ 果実同士が接した部分でリング状の被害痕、加害がひどい場合、褐変し腐敗する

◆ 種の識別

- ✓ 類似した種類が多く、肉眼での判別は困難
- ✓ 種によって薬剤の防除効果が異なるので、注意が必要

ハナアザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ

ハナアザミウマ

ビワハナアザミウマ

キヨハナアザミウマ



褐変被害とリング状被害

果実への寄生状況

■ 薬剤試験（令和7年11月～12月実施）

試験方法：宮川早生の着色果実を調整した薬剤に10秒間浸漬し風乾。飼育容器に果実をシリコン栓で固定した後、処理3日後、7日後、14日後に約10～15頭の成虫を放虫し（1区4反復）、放虫後12～15日後に生死を判定した。人工降雨処理では、薬剤処理3日後の果実に降雨量が1、5、15、25mmとなるようにした。

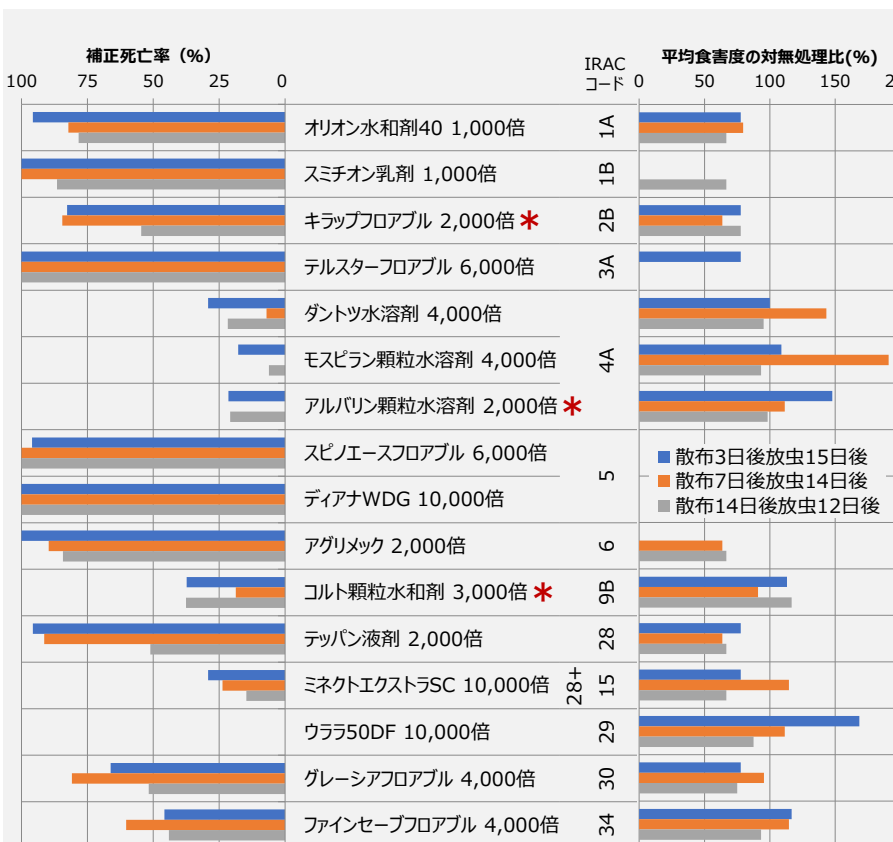


図1 ハナアザミウマに対する各種薬剤試験の結果

※平均食害度は、1果実当たりの平均的な食害重症度を示す数値（1～3段階で評価）。数値が低いほど効果が高い。*はハナアザミウマに登録なし

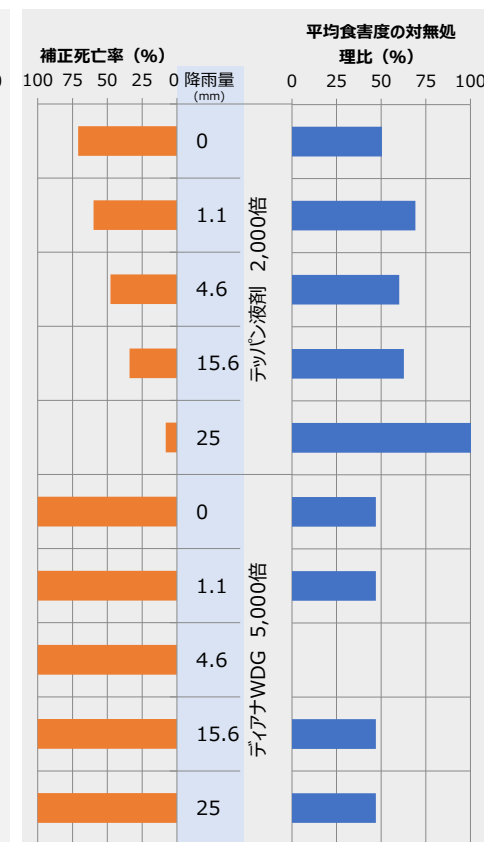


図2 ハナアザミウマに対する人工降雨処理による薬剤の効果

- ・スピノエースフロアブル、ディアナWDG、テルスターフロアブルが処理14日後まで、効果が高かった。
- ・オリオン水和剤40やスミチオン乳剤、アグリメック、テッパン液剤は、成虫の死亡率が高いものの、処理後日数が経つほどに死亡率が低くなる傾向があった。
- ・テッパン液剤は、降雨後には著しく防除効果が低下する傾向があった。